埼玉大学紀要　教育学部，60(1)：57－65（2011）

高校生の『家庭科』保育体験学習における意識変容

吉川　はる奈　　埼玉大学教育学部家政教育講座
尾城　千鶴　　埼玉県立栗橋北彩高等学校

キーワード：意識変容、保育者、体験学習、高校生、家庭科

１．問題と目的

子どもを育てにくい時代と言われる現状の中で、「社会全体で子育てをしよう」という意識の高まりの加速や、「親性」、「育児性」について取り上げ、育成していくことの重要性が指摘されることが著しくふえた。

2009 年告示の高等学校家庭科学習指導要領の保育に関する領域では、乳幼児と直接触れ合う体験を通して学ぶことが求められている。具体的には「子どもとの触れ合いをとおして、子どもの生活と遊び、子どもの発達と環境とのかかわりなどについて理解させ、子どもと適切にかかわることができるようにする」としている。

保育体験学習は、現代の高校生にとって、幼児の特徴を具体的に理解する上で効果的であると認識されつつも、実施する際には様々な課題も多いと指摘されている。

尾城・吉川（2010）は、S 県高等学校全校の家庭科教諭を対象に保育体験学習の取り組み実施状況についての質問紙調査を行い、現状を把握したうえでその効果及び問題点を整理した。

特に園での体験学習の部分だけでなく、保育領域全体の中で、保育体験学習をどのように実施し、また事前指導、事後指導をどのように行っているか家庭科の保育体験学習全体について明らかにすることを試みた。その結果、保育体験学習を実施している高校と実施しない高校とがそれぞれ半数ずつであった。授業を担当する家庭科教員への調査では、保育体験学習の重要性や意義は実施の有無にかかわらず認識していながらも、実施するための時間的余裕がなく、実習を行うことが困難であること、また実際に保育体験学習を行っても、保育体験学習のための事前授業や事後授業には十分な時間がとれず、そのために保育体験学習が終了後、十分に活かされていないことが示唆された。このように保育体験実習の実施の有無とともに、保育体験学習の実施が活かされるようにするための工夫や課題は何か明らかにすることは重要である。

さらに尾城ら（2010）は、授業実践をとおして家庭科における保育体験学習の効果と課題について検討した。具体的には「家庭総合」の中で保育体験学習を取り入れ、その効果について整理した。昨今の家族の変容や社会変化の影響によるものか、事前に、高校生が子どもに対する適切なイメージをもって、保育体験学習を行うことが難しくなっているという実態も明らかになった。

そこで本稿では、高校生の保育体験学習の事前、事後意識調査から保育体験学習で高校生がどのような意識変化をするのかについて明らかにする。また実際に保育体験学習で高校生を保育現場に受け入れる立場である幼稚園の保育者に意識調査を行い、保育者からみた保育体験学習の意義について整理し、その結果をふまえながら、保育体験が保育領域の学習に活かされるうえで必要なことは何かについて示唆をえたい。

２．方法

2-1　調査対象

高等学校家庭科の保育体験学習を受け入れている幼稚園の担任教諭 14 名と「家庭科」保育体験学習に参加した高校生 140 名。

2-2　調査時期

2009 年 11 月~2010 年 3 月

2-3　調査方法

保育者への調査は、質問紙調査法による無記名自記式。自由記述を含む 7 項目について選択してもらった。

また保育体験実習に参加する高校生への調査として、事前、事後の自由記述を含む意識調査をおこなった。

2-4　調査内容

保育者への調査内容は図 1 のとおりである。自由記述を含む以下の 7 項目に記入してもらった。

図 1　保育者への調査内容

1、対象者の担任する年齢クラス
2、平成 21 年度に受け入れた高校生の学年
3、幼稚園での保育体験学習の具体的内容
4、高校生の保育体験における取り組みかた
5、園児にもたらす効果
6、保育体験の意義について考えること
7、要望

3．結果と考察

3-1　保育体験学習の具体的内容

具体的な内容は図 2 とおりである。図 3 のように高校生は各クラスに 4 名ずつ分かれて参加した。お昼にはお弁当を一緒に食べ、図 6 のように、園で終わりの会に参加し、高校に戻るという流れである。

図 2　保育体験学習当日の生徒の予定

1、体育着に着替えて高校正門集合
2、出席確認、園に徒歩で移動
3、園全体会での始まりの会に参加
4、クラスに分かれて保育体験
5、おわりの会、園の全体会に参加
6、高校に徒歩で戻る

3-2　高校生の保育体験学習前の意識の特徴

保育体験学習に参加する高校生が保育に対するどのような意識をもっているのかについて、事前の意識調査を行った。保育体験学習の実施は 5 回に分けて行い、参加したのは計 140 名であった。

1）幼児と遊んだ経験の詳細

まずは幼児と遊んだ経験の有無についてたずねたところ、30%の生徒が幼児と触れ合う経験として中学生時に家庭科や職業体験で参加した幼稚園、保育所での保育体験学習をあげた。また 10%がきょうだい、親戚などの世話をあげていた。近所にいる子どもの世話をした者はわずか 2%だった。きょうだい、親戚が身近にいない高校生にとっては、幼児と授業の中でふれあう体験は、貴重な機会といえる。

2）保育体験学習前の高校生の気持ち

保育体験前の気持ちとして、高校生が記述したのは、13%が「楽しみである」ということだった。一方、「不安である」と回答した高校生も 12%と同程度をしめた。また「初めてのことなので頑張りたい」という生徒は 7%であった。

高校生の気持ちとしては、楽しみに思う生徒も不安に思う生徒も両方同程度いるということである。

3）不安に思う理由

また上記で不安に思う理由として挙げられたのは、「子どもに泣かれる可能性がある」、「子どもに好かれるか不安」、「自分はこどもが苦手な

ので、きちんと笑顔で相手ができるかが不安」「子どもの接し方がわからない」が多かった。

以上のように、保育体験学習に参加する前の高校生は、子どもとふれあう機会が少ない状況にある中で、子どもと「うまく接したい」が、子どもの反応が予想できず、「自分が接したとき」に「泣かれたらどうしよう、好かれないかもしれない、仲良くなれないかも・・・」など大きな不安になっていたと思われる。特に高校生がもつ、「子どものイメージ」は、「にこにこ笑顔」でいて「かわいい」とほとんどの生徒が記述しており、「子どもに接すること」へのイメージや「子どもの特徴」としての「にこにこした(泣かない)子ども」という固定イメージをもっており、生徒を緊張させ不安にさせることに影響していると思われる。

3-3　保育体験学習の実施形態

本調査の対象とした保育体験では、高校生が幼稚園に出向き、園児の活動の中に一緒に参加し、約３時間をすごすというものである。

図３　クラス活動に一緒に参加する高校生

特に椅子に座って園児と同じテーブルを囲む活動もあり、大きな体に成長した高校生が、「小さいなあ」とつぶやきながら幼児用のいすに座って子どもたちに目線を合わせようと背中を丸める姿がみられた。

また図４のように、絵本や紙芝居、エプロンシアターなど高校生が事前に作成してきたものを園児の前で発表するという時間が幼稚園側の配慮で用意された。そして生徒が作成したおもちゃで園児と一緒に遊んだりする姿もみられた。

３時間の中には、お弁当の時間が含まれ、一緒にテーブルに座り、持参したお弁当を高校生も一緒に食べた。高校生が園児には理解しにくい説明をして、園児が理解できない場面もあり、通常授業ではできない経験もしていた。

図４幼児の前で準備した遊びを披露する高校生

また、絵本の読み聞かせなど、保育士の補助的な役割を担っている場面もあった。

基本的な形態は、安全に配慮しながら幼児と高校生とが一緒に遊ぶことを中心にすすめられた。

3-4　保育者の保育体験学習に対する意識

次に保育体験学習の受け入れ先としての幼稚園の担任保育者が、どのように高校生の保育体験をとらえているかについて、保育者の記述を整理した。

１）高校生の保育体験での取り組みの様子

・最初は緊張している生徒も見られたが、少しずつ会話をしたり遊んで行くうちに笑顔が見られるようになり良かったと思う。お弁当を食べる時に、高校生同士で一緒に座り会話をしている姿が見られたので、離れて座ったりもう少し

子どもとコミュニケーションを取った方が良かったと思う。
・短い時間の中で、子どもたちと関わろうとする姿勢が良かったと思います。最初は表情が硬かった高校生も子どもとの関わりを通して帰るときには笑顔が見られたりとお互いにとって良いものになったのではないかと思います。
・緊張した面持ちの生徒さんもいれば、楽しみにしていたのかなと思う生徒さんもおり、それぞれが子どもたちとの関わりを楽しんでいるように感じていました。

受け入れ園の担当した保育者の多くが、保育体験学習を経験する過程で、高校生が緊張した姿から緊張が和らいでいく様子がみられると記述の中で指摘している。人と関わりながらその中で緊張が和らいでいく体験は、人との関わりへの自信につながるものでもある。

2）保育体験学習が園児にもたらす効果

保育者は、園児への効果も指摘している。保育体験学習は、園児にとって、家族と異なる異年齢の相手と遊ぶ機会として、とても貴重であったという。

・普段あまりかかわる事が少ないと思うので、一緒に遊んだり、活動し良い体験だった。子ども達も来る事を楽しみにしていたり、嬉しそうに遊んだり、会話をしている姿が印象的だった。
・たった一週間でも来てくれることを心待ちにしている幼児がたくさんいました。友達と関わるような感覚で子どもたちは高校生を誘って遊んでいたり、高校生が本気で遊んでくれることで遊びに集中している子が多かったです。
・子どもたちもお兄さんお姉さんが来てくれることを毎回とても楽しみにしています。お兄さんお姉さんが来てくれることで普段お友達と自分から関われない子や控え目な子も自分から進んで関わっていく姿が見られたり、お兄さんお姉さんがたくさん遊びを通して関わってくれることで子どもたちも満足のようです。
・すっかりお兄さんお姉さんに甘えている子もいれば、恥ずかしくて話しかけられない様子の子もいました。そして、「お兄さん、お姉さんってすごいな」と感じる場面もあったようです。
・子どもたちは、すごく楽しみにしていて、また、当日も別れるのが嫌になるくらいな気持ちになるようです。先生とは違う遊びをしたり、特にお兄さんは園の中で男性と触れ合う時間もあまりない為かすごく嬉しいようです。高校生と触れ合う中でも約束事を伝え、色々な人と関わる楽しさを感じていると思います。

保育者は、記述の中で高校生が「本気で」遊ぶことが、園児にとって「とても楽しい」機会となったと指摘している。ここでの「本気で」「遊ぶ」とは「子どもと一緒に楽しめた」、「子どもと共感し」「子どもの立場で遊びを共有できた」ということでもあろう。それは、高校生にとっても、幼児にとっても楽しい時間になったのではないだろうか。

昨今のきょうだいの少なさ、核家族化は園児にとってのきょうだい関係、異年齢の仲間関係を経験しにくい深刻な状況をもたらしており、その意味で園児にとっても日常では得られない経験であり意義は大きいという。

3）保育者がとらえる保育体験の意義

・子ども一人一人の性格が違うように、その子に合った関わり方を見出していくことが必要だと思います。子どもたちと関わることで子どもそれぞれの個性に気づいていただけたらと思います。
・子どもたちと接することで、大切にしてあげたい気持ちを感じ、子どもに向ける目を変えていってほしい。
・一日一緒に過ごし、未熟な面やこんな事まで出来るということを知ってほしい。
・子どもたちのいろいろな面に気付いてほしい。

・*一生懸命子どもたちに向き合い楽しんでほしい。*
・*子どもと一緒にすごし、1 日の園での過ごし方を知る中で具体的に学んでほしい。*
・*子どもがどんなときに喜び、どんなときにおこったり泣いたり、くやしがったりするのか気付いてほしい。*

保育体験学習の意義として、保育者は、いろいろな園児がいることを知る機会になること、つまり「ひとりひとりに合った関わり方が必要であることに気づいてほしい」と指摘する。

それは高校生が園児と「一生懸命に」向き合うことで得られるものととらえる。具体的には、「子どものいろいろな面を知ってほしい」という。単に固定された「かわいい」という子どもイメージ、にこにこして（泣かない）子どもイメージではなく、子どものさまざまな姿に触れることを通して、子どもが多様な表情をし、多様な表現のしかたをすること、いろいろな子どもがいることを知ってほしいということである。

3-5　保育者の保育体験学習への要望

以上のように保育体験学習は高校生だけでなく園児にとっても大きな意味をもつことを受け入れ側の保育者は指摘している。

保育ニーズの多様化などにより、保育現場の日常は、多忙化している言われるなかでも、このように高校生の受け入れが、園児にも新たな異年齢交流の機会としていくことができると前向きに捉えているということである。

しかし受け入れる際に生じる問題や課題を以下のように指摘している。

・*毎年つくってきてくださる本が壊れやすいので、次回は違う仕掛けの本がよいと思う。*
・*絵本は壊れやすいので補強したものにしてほしい。*
・*子どもがわかりやすいようにもう少し大きくつくってほしい*
・*園にはおもちゃはあるので、おもちゃよりも、子どもとしっかり遊べるようにしてきてほしい、子どもが楽しく遊べることが何より大切*

園に出向く際に高校生が持参するおもちゃや絵本は授業の中で手作りをしている学校が多い。しかし園では、それを子どもが使うので、扱いも粗雑になることもあり、扱いやすさや頑丈さ、またわかりやすさ（見やすさ）が求められる。適さないものを「お土産」とされるより、高校生と一緒に遊ぶことを求めている。

家庭科教諭が手作りのお土産を「作る」ということ、「どんなものを作るか」ということに心を砕き、準備をしていくというが、「作る」際には「使う子どもの姿」への配慮がないと、作品が活かされない。子どもの生活の中での遊びの姿を十分知り得ない生徒が、子どもの動きを予測しながら、玩具の製作をすることもあろう。しかし「作る」こと、それを「渡す」機会として「保育体験学習」があるのではない。「保育体験学習」は、子どもと直接、触れ合い、遊ぶことをとおして子どもを具体的に知るという機会であり、その重要性は保育者も認識している。

「手作り玩具」を「渡す」だけの機会にならぬよう、家庭科教諭側も十分な注意が必要と思われる。

3-6　保育体験学習実施後の高校生の意識変化

家庭科担当教諭への調査の際に、保育体験学習を実施できない理由として、もっとも多かったのが、「保育体験学習のための時間が取れない」であり、次いで、「生徒の人数が多すぎて連れていけない」「近くに幼稚園や保育園がない」であった。他には、「生徒が問題を起こすのではないかと思って連れていけない」を挙げていた。
高校生が実習先でしっかり保育に参加できるだろうかという不安が大きい。生徒を学校外に出すということは安全面の不安が生じるのは無理もない。

一方で生徒の側も保育体験に行く前の不安は想像以上に大きい。不安の理由はさまざまだが、「子どもと遊ぶ」という高校生にとって慣れない経験に、「子どもに泣かれて」「失敗するのではないか」という不安は大きい。しかし、保育体験実施後の高校生の意識は大きく変化している。高校生の記述をみても明らかであり、また受け入れを担当する保育者も高校生の表情の変化をしっかりとらえて指摘している。

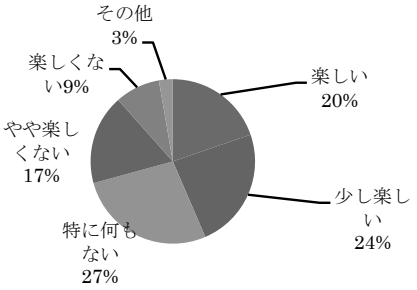

図５　　実習前の高校生の気持ち

図５は保育体験前の高校生の気持ちを表している。保育体験学習前に高校生に子どもの世話をしたり、遊んだりするのは楽しいかどうかをたずねたところ、「楽しい」は20%、「少し楽しい」を合わせて44%だった。また「楽しくない」、「やや楽しくない」を合わせると 26%だった。「楽しい」と指摘する高校生は多いのだが、「楽しくない」と指摘する高校生もめだつのである。

しかし、図６にみるように保育体験学習実施後に高校生に子どもと遊ぶのは楽しかったかどうかをたずねたところ「楽しかった」のが66%と半数をこえ、「少し楽しかった」を含めると８割をこえ、増加した。さらに「楽しくなかった」というのは9%と減少した。

子どもと遊ぶことは「楽しくない」と思っている生徒が、実際に体験学習をとおして、実習後にはそのような気持が変化している可能性があるということである。

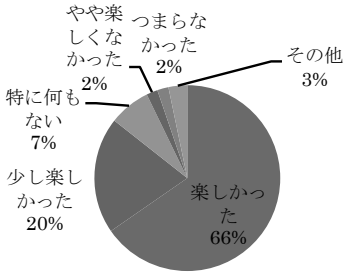

図６　　実習後の高校生の気持ち

保育体験の時間は非常に限られた短い時間であるが、受け入れの保育者は「たとえ短い時間でも、最初は笑顔のなかった高校生が、帰る際には必ず笑顔になり、「楽しかった」と言ってくれてうれしい」と指摘している。また別の保育者は「短い時間でも、子どもに関わろうとする姿勢がよかった。短い時間であっても、園児も楽しかったと思う」と指摘している。

これらからは、時間とは関係なく、実習をとおして高校生が意識を変化させ、彼らの表情変化に表れるということである。もちろん、実習での高校生の変化を的確にとらえ、活かしていくためにも事前、事後の指導をどのように行うかは大切になるだろう。園に行って、ただ、楽しかっただけで終わりにしては効果がないのだが、事後指導については、十分時間がとれないというのが実態である。

高校生がどんな気持ちを抱えて実習を終えてきたのか、についてクラスでまとめていく時間が必要である。他の生徒が何をとらえたのかということを知ることも大切になる。他の生徒の捉えている状態を知り、自分も体験してきたことをまとめながら、再度ふりかえることによって、経験したことが活かされるのではないだろうか。

3-7　イメージできないことによる不安

図７はおわりの会の様子である。

図７　おわりの会（全体会）での高校生

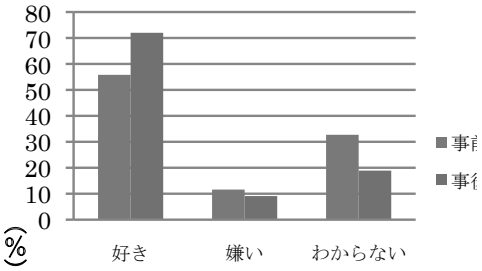

図８　実習後の子どもに対する意識変化

幼稚園で園児と一緒にクラス活動に参加するわずかな経験ではあるが、生徒の記述には、「新しい発見もあり、面白かった。」「これまで子どもと接する機会がほとんどなく、今回接し方に悩みましたが、わかったことは、子どもの目線で目を見て話すということが大切だということです」「正直、子どもは好きではなかったが、この実習で考えが変わった。少しの時間でしたが、たくさんの表情を見せてもらいました。初めは、不安で、不安で仕方がなかったが、今は楽しく貴重な良い経験ができたと思っています」
など書かれていた。

図８は、実習後の子どもに対する意識の変化である。子どもに対して嫌いと答える生徒は保育体験前後でほとんど変わらなかったが、わからないと答える生徒が大きく減り、好きと答える生徒が増えた。

わからないというのは、「イメージできない」ということを表現したと捉えるならば、体験実習に参加することによって、イメージできない生徒が減った、イメージできるようになったと推測できるだろう。

図９は幼児が近寄って来て、高校生が仲間に入る場面である。幼児とどのように遊んだらいいか、わからず不安という気持ちも抱えながら、実習に入っていく生徒は、子どもからの働きかけで遊びのきっかけをつくることもみられる。

実習後、子どもとかかわることや子どもの姿がイメージできることによって、わからないという不安は減る。子どもは泣くこともあり、怒ることも笑うこともあり、「こんなふうなんだ」、「いろいろな表情をするんだ」、ということが実感できるのだろう。

図９　幼児が近寄ってくれ「ほっとした」という高校生

４．まとめと今後の課題

今回の調査では、受け入れ側である幼稚園の保育者の感想をていねいに整理することで、保育体験学習を再度、保育学習の中で活かす可能性を見出そうとした。保育現場で実習を行った生徒側の感想からは、保育体験学習が生徒にと

って充実した時間、機会であったことは理解できるが、送り出す教員側の不安や困難さ、課題もまた山積している。

一方で、受け入れの保育者側は、保育の中で高校生が何を学んでいるのかを保育者の立場でていねいに捉え、保育体験の意義を認めており、その視点を高校教諭側に提示し、その体験の場を終了後の学習に活かしていくことは重要なことであろう。

保育者が捉えているように、保育体験学習が、実習参加の高校生だけでなく、園児にとっても貴重な機会となるように、担当する高校の教諭も、意識を常に新たにしながら保育者と相互理解を図り、振り返りを行いながらすすめていくことがのぞまれる。

引用文献、参考文献

・尾城千鶴・吉川はる奈：高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題　埼玉大学紀要(教育学部)　59(2)　59-68　(2010)

・伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討　日本家政学会誌　５８　Ｎｏ．６　315-326(2007)

・吉川はる奈、金子京子：中学生と大学生を対象にした保育学習における実践的研究　埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要　6　171-179（2007）

・中嶋明子、砂上史子、日景弥生、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第１報）保育体験学習者の意識変容過程の構図化　日本家庭科教育会誌　46-4　351-360（2004）

・砂上史子、日景弥生、中嶋明子、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習の意識変容（第 2 報）　日本家庭科教育学会誌　48-1　10-21（2005）

・渡貫由季子、武藤安子：高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因　自我発達の関連で　日本家庭学会誌　55(2)　135-144（2004）

・鎌野育代、伊藤葉子　子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果　日本家庭科教育学会誌　52-4　283-290　(2010)

・滝山桂子　保育学習に関する中学生・高校生・大学生の意識と課題　日本家庭科教育学会誌　42-3　47-54（1999）

・室　雅子　中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割　家庭科教育研究所紀要　21　75-85　(1999)

・尾城千鶴・吉川はる奈：高等学校「家庭総合」における保育体験学習の効果と課題　埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　9　149-158（2010）

（2010年９月30日提出）
（2010年10月15日受理）

Consciousness Change in Senior High School Students for Childhood Education and Care in Home Economics

YOSHIKAWA, Haruna
Faculty of Education, Saitama University
OJIRO, Chizuru
Kurihashihokusai High School

Abstract

The aim of this study is clarifying the consciousness change in senior high school students for childhood education and care in home economics. Questionnaire surveys are held for senior high school students before and after a class of childhood education and care. Kindergarten teachers comment the educational effectiveness of childcare activities in the class. As a result, the following points are found out on the educational effectiveness of childcare activities in a home economics curriculum. Senior high school students pass through a variety of experience playing with children. When children cry, laugh and angry, their expression change. They say "beaming faces of children are very cute" but they don't know children are many-sided character. So they are worried about that they fail in playing with children, when they see the crying face of children.

It was proposed that childcare activities in the class give senior high school students to understand many-sided character of children.

Key Words : consciousness change, kindergarten teachers, experience in early childhood education, senior high school students, home economics